

＜大和川＞

◇諸元等¹⁾

流域面積：1,070km²

幹川流路延長：68km

流域内人口：215万人

主な流域市町村：1市15町2村

◇流域及び河道¹⁾

大和川は水源を笠置山地に発し、初瀬川溪谷を下り奈良盆地周辺の山地より南流する佐保川、秋篠川、富雄川、竜田川、北流する寺川、飛鳥川、曾我川、葛下川などの大小の支川を合わせながら西流した後、大阪府と奈良県の府県境にある亀の瀬狭窄部を経て河内平野に入り、左支川の石川、東除川、西除川を合わせ、大阪湾に注ぐ一級河川です。



図－1 大和川流域図¹⁾

◇歴史・文化^{1),2)}

中流部に位置する奈良盆地は、大和川によって形成された肥沃な土地で古くから人々が生活を営み、大和川からもたらされる水を使った農耕が営まれ、古墳時代から飛鳥時代、奈良時代にかけて日本の政治・文化・産業の中心地として発展してきました。そのため、大山古墳（仁徳天皇陵）に代表される「百舌鳥・古市古墳群」や石舞台古墳、高松塚古墳、キトラ古墳など古墳時代から飛鳥時代の遺跡が現在まで保存されているほか、藤原京、平城宮跡等の「古都奈良の文化財」及び「法隆寺地域の仏教建造物」などの歴史資源が数多く存在しています。

◇治水事業¹⁾

大和川の洪水や治水事業は古くからの記録に残されています。788年(延暦7年)には和気清麻呂が新川を開削し、茶臼山の南を通して大阪湾に直接放流する付け替え工事に着手しましたが完成には至っていません。

江戸時代に入り幾多の計画を経て河川工事が実施されましたが、幕府は1703年(元禄16年)に大和川付け替えを決定し、翌年の1704年(宝永元年)には淀川と切り離すための付け替え工事を完成させています。この工事によって、河内や摂津等の旧河道や池であった土地は耕作地となり、河内木綿の生産地として生まれ変わるなど、江戸時代における日本経済・商業の中心地としての大阪の発展に寄与しました。

また、中世に日明貿易で繁栄した堺は、大和川の河口部が堺港の北側に付け替えられたため、大和川から流出した土砂により港の堆積が加速しました。



図－2 旧大和川・派川(玉櫛川・久宝寺川)と新大和川及び開拓された新田³⁾

加えて、日明貿易の中止やポルトガル船渡来禁止等により交易船が減少するとともに、大坂の急成長により堺港は商業港としての地位を低下させていきました。このような状況に対して、繰り返し浚渫を行い、港の機能回復が図られるとともに、大和川からの土砂を用いた埋め立てにより河口部に広大な新田が開かれ、堺港周辺は新地として賑わうこととなります。

近代における治水事業としては、1931年(昭和6年)の亀の瀬地すべりによる大和川の閉塞を契機に、災害復旧工事が1932年に着工され、引き続いて1933年には大和川応急工事が着工し、1935年に完成しました。しかし、1934年以降も洪水による被害が相次ぎ、1966年には一級水系に指定されるとともに、工事实施基本計画が策定されています。

その後、1982年(昭和57年)8月には大和川での戦後最大の洪水が発生しました。2013年(平成25年)に策定された「大和川水系河川整備計画」では、この洪水で氾濫が無かったときの柏原地点の流量を $2,900\text{m}^3/\text{sec}$ と推定した上で、中上流部において $1,000\text{m}^3/\text{sec}$ の流水を調節し、柏原地点の流量を $2,800\text{m}^3/\text{sec}$ とする規模で河道を整備することにしています。

◇中甚兵衛らによる付け替え工事^{3), 4), 5)}

江戸時代に大和川では幾多の河川改修が実施されましたが、それでもなお洪水の被害を受ける地域の村が1701年(元禄14年)に抜本的な治水対策を堤奉行に願い出る訴えを起こしています。そのなかでも河内国今米村(現在の東大阪市今米)の庄屋 中九兵衛は、大和川の付け替えを幕府に何度も嘆願しましたが志を果たせぬままに亡くなります。

父九兵衛の意志を継いだ甚兵衛は以後40余年に亘って嘆願活動を続けました。甚兵衛を支援したのは大坂の代官で堤奉行も兼務していた万年長十郎です。河村瑞賢の治水工事に随行した経験もあり、甚兵衛の資料を詳細に検討した結果、その考えを支持し率先して幕府への陳情を行っています。

工事は石川合流点付近から堺浦まで西へ真直ぐ流す、延長約14km、幅約180mの川筋を、盛り土や高台を切り開く工法で工事は進みました。工事区間は、幕府が費用を負担する「公儀普請」と「御手伝普請」とに分けて進められ、幕府側の担当者は大目付の大久保甚兵衛、代官の万年長十郎らで、甚兵衛も「普請御用」として現場に立っています。幕府とそれぞれの藩が競うように工事区間を分担遂行した結果、当初3年と見込まれた工事はわずか8ヶ月足らずという早さで完成しました。

この付け替えによって中河内の村民は水害を免れ、鴻池新田をはじめ1,060町歩(約1,050ha)の新田が続々と開発されました。大和川の付け替えに必要な金額は71,500両(現在の価格では約140億円)でしたが、その約半分となる37,500両を幕府が負担し、残りを他藩が負担しました。幕府は旧大和川河川敷の開発権と所有権を地代として民間に売却することで、大和川の付け替えで負担した金額をほぼ賄うことができました。



写真-1 中甚兵衛翁像
(大和川治水記念公園)

◇参考文献

- 1) 国土交通省近畿地方整備局：大和川水系河川整備計画(国管理区間)，2013.11.28.
- 2) (公社)日本水環境学会関西支部川部会編集・発行：関西の川歩き，2018.6.30.
- 3) 国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所：大和川付け替え300周年資料，2004.
- 4) 柏原市：大和川の付け替えに関するリーフレット，2011～2019.
http://www.city.kashiwara.osaka.jp/docs/2015092500015/?doc_id=3777
- 5) 大阪府：大和川分水築留掛かり，2020.10.9.
http://www.pref.osaka.lg.jp/chibunm/chubu_nm/tukidome.html